

【追悼】（『統計学』第87号 2004年9月）

## 山田 貢さんを追悼する

田中章義\*

経統研の古い会員であった山田貢さんが、2004年1月18日逝去された。1929年11月4日の生まれであったから、享年74歳であった。

山田貢さんは札幌で生まれ育った。大東亜戦争最中の旧制札幌一中では、手稲鉦山で学徒動員という名の強制労働に敗戦まで8ヶ月間従事した。戦後、北大法経学部を卒業し、農林省農業総合研究所（北海道支所）に勤めた。1961年には経済企画庁内国調査課へ転じて労働問題を担当した。1970年に企画庁を辞して東京農工大学工学部助教授、1986年には大東文化大学経済学部教授となったが、脳内出血で倒れて1999年に依願退職した。その後リハビリに努めてうれしい回復を示されたが、もう一つの病であった癌の進行によって、永眠された。

山田さんには、小学校、中学校、大学、職場、学会と、生涯の各時期に心から信頼を寄せる友人がいた。その人たちからいくつかの追悼文が集まってきて、いま小冊子を編集集中である。そのうちから寄稿者のお許しをえて、経統研に関係のある部分を抜き出して紹介させて頂き、本誌における追悼文としたい。

### 1. 日中統計学交流（伊藤陽一）

経済統計学会には、現在、日中統計の研究と交流を目的とする日中統計研究部会がある。これに先立って1990年代の研究や交流の積み上げがある。この過程で大きな役割を果たされたのが山田貢さんであった。

1980年代の末から、三瀨信邦、長田光洋、泉弘志、近昭夫さんたちが、中国で開かれた

IAOS や中国工業統計学会の折に中国との接触をされ、また1991年1月の岳魏氏の来日ふくめて往復があった。山田貢さんの勤務先の大東文化大学が中国研究と中国との交流を重視していた関係で、1991年9月はじめに9日間をかけて山田貢さんを長として、中村浩、菊地進、岩崎俊夫と私の5人のグループがつくられ、中国国家統計学会・国家統計局の招きで、北京の国家統計局、北京大学そして長安の統計学院を訪問した。現在でも、日本と中国との交流の会議・会合の設定では、なお慣習や文化の違いから簡単ではないのだが、山田貢さんにすべてをお任せして、グループ員は気軽な旅行（国家統計局での会合や、長安統計学院での講義があったが）で、はじめての中国を経験したのであった。

その後、1992年7月に中国から国家統計局関係者と中国産業統計学会のメンバーが来日し、大東文化大学で開催された経済統計学会第36回全国総会に参加する。これらの経過の上で、中国側と経済統計学会との間で経済統計学の交流を2年毎に行うことになり、1995年に世界統計学会（ISI）が北京で開催されたときに、「第一回日中経済統計学国際会議」が北京の煤炭管理幹部学院で開かれた。このときの団長が三瀨信邦氏で、日本側からの参加者は25名の多数であった。山田さんは北京には行かれなかったが、事前の準備にあたっておられた。第二回の会議は1997年に京都大学での経済統計学会第41回全国総会に続いて関西大学の高岳館（望岳荘）で行われた。中国側を日本に迎え入れるため、参加費・宿泊費用等の援助や見学先のセッティングが必要であった。この資金集めに経団連その他への要

\* 東京経済大学経済学部

〒185-8502 東京都国分寺市南町1-7-34（大学）

請に奔走され、さらに中国側との連絡や会議のプログラム準備にあたられたのも山田貢さんであった。その後の交流については、山田さんからバトンを受けて、私が日本側の責任者になった。これは三瀨さんや山田貢さんの仕事を維持・発展させるのが後継者の任務であるとの思いからであった。第四回は、法政大学の特別予算と日本統計研究所のスタッフや院生の協力を得たのだが、会議の設営にはかなりのエネルギーが必要だった。1990年代半ば前後に、人的な支援体制を十分持たなかったと思われる山田さんが、この交流に黙々と努力を払われていたことを思うと、今更ながら、大変であったろうと思う。

## 2. 『統計学』記念号第2集(1985)の編集

山田貢さんが静かに責任を果たされたもうひとつが、経済統計学会の機関誌『統計学』の記念号第2集の編集であった。この記念号は、『統計学』の発刊30周年を記念した1975年の第1集の10年後に編集された。当時、山田貢さんは、経済統計学会関東支部の責任者の地位にあった。10年後の第3集まで記念号は、出版社の所在と会員数の関係で関東支部が最終的な編集責任者を出す形できている。私は記念号第1集とともに、この第2集のスタートにも関与していたが、大詰めにあたる1985年度に海外在留を予定したこともあって、この仕事を担当するには年齢が高い山田貢さんであったが、編集責任者をお願いする形になった。メールはおろかワープロ器がボチボチ登場した時期で、コピー器械がわずかに使えた時期であった。山田貢さんの手書きの執筆者候補案や執筆者へのお願いの文書が、今も手元にある。

山田さんは、周囲から希望された任務は、当初遠慮するが、周辺状況から他に道がないと見るといさぎよく引き受け、また、作業を広く分担にまわすのではなく、多くを自分でこなすスタイルをとった。ふだんから研究上

の問題以外には寡黙にみえる山田さんは、作業が大変であったことなどグチめいた話を殆どしなかった。何事についても訊ねると、頬笑みながら「マァ、楽ではないかもね」と一言で片付ける程度だった。

時代とともに、私たちは、新しい課題や作業に取り組むが、しかし、その基盤となる既存の制度を生み出すまでに投入された努力に深い思いを致すことは少ない。いずれ日中間の研究交流や『統計学』の歴史が振り返られることがあるとしたら、山田さんの貢献は特記すべきことになるだろう。山田さんの雰囲気からすると、多くの雑務的作業の責任者であったことは、想像し難いかもしれない。しかし、潔くこれを担い、後輩にバトンタッチされた方であった。

## 3. 経済統計学の研究業績(山田喜志夫)

山田貢さんの研究領域は大きく分けると、農業関係と統計学関係になるが、農業関係は私の専門外なので除くとして、統計学関係では日本の経済計画、消費者物価指数、労働分配率の国際比較、剰余価値率の計算が主なものである。

統計学者は往々にして一般人には関心の無い瑣末なテーマに取り組みがちであるが、山田さんは経済企画庁で長年日本経済の現実を考察してきただけに、現実感覚あふれるテーマを扱ってきた。特に山田さん自身企画庁時代『経済白書』を執筆しており、後年池田茂のペンネームで書いた「経済白書の経済学」は「日本の経済計画と計量経済学」(『経済分析と統計的方法』所収)と並んで山田さんの特質をもっとも発揮した貴重な論文だと思う。

経済企画庁では労働問題を担当した山田さんは、1960年以降、実質賃金算定の基礎資料となる消費者物価指数の問題に研究課題を集中していく。消費者物価指数は物価指数ではなく生計費指数であるという基本認識にたつて、丹念に技術的問題にも分け入って家計調

査対象世帯の性格や階層別消費者物価指数等の論点を考察している。

労働分配率の国際比較の研究では、労働分配率の計算自体にいろいろ問題があり、さらに国際比較となると会計操作の違い等技術的にも面倒な課題が山積している。山田さんはこの厄介な問題に取り組み、同じく第二次大戦の敗戦から出発したドイツとの比較を試みている。

労働分配率の計算とならんで剰余価値率の計算問題にも関心を持ち、特に剰余価値率を必要労働時間と剰余労働時間の比率として労働時間で計算するという一部でおこなわれていた試みにたいしては、経済学における価値の概念までさかのぼってあるいは価値と価格の関係にまでさかのぼって詳細に理論的に批判している。競争を本質とする市場メカニズムのもとでは、現実に投下されている労働量を直ちに価値とすることはできないというのがその批判の要旨である。価値の実体と価値の形態を区別せよとの趣旨であろう。山田さんはこの価値と市場メカニズムとの関係について論点をさらに追求し「市場価値論の諸問題」という理論的考察をおこなった論文も発表している。

研究者としての山田さんは前半はいわゆる官庁エコノミスト、後半はアカデミーの研究者であったが、その研究の特質は現代の課題を直視した実証研究と理論研究の統合であったと思う。

#### 4. 山田さんの人柄 (田中章義)

山田貢さんを玲瓏玉れいろうのごとき人物と評した方がいるが、まったくその通りで、長い付き合いの間で山田さんから人の悪口を聞いたことがない。小学校からの旧友たちの山田評は、平静、温厚、真面目、努力家などであり、いま流行りの「自己アピール」はとくに苦手な人であった。したがって目立ったエピソードもない。

山田さんは兄の友人だったので、私が小学校2年生の時から知っているが、やさしい、紅顔の美少年というその時の印象はずっと変わらない。企画庁時代は「橋蔵さん」というあだ名もあったらしい。大学へ転じてからの山田さんは、アジアからの留学生の世話を熱心にしていて。私が保証人だったベトナムの学生が大東文化大学の大学院を受験したときには、指導教授の依頼からアルバイトの紹介など、博士号をとるまで面倒を見てくれた。他の留学生と一緒に自宅での食事にも呼ばれたともいう。弱い人には特にやさしいのが山田さんだった。いま思うと、被抑圧階級の解放に微力を尽くすというのが生涯の目標だったのかもしれない。努力家であるとは感じていたが、自宅のラジオで毎朝ずうっと、ドイツ語、英語、中国語の勉強をしていたということ、亡くなってから知った。

経統研創設者の一人、故木村太郎会員から聞いたエピソードの思い出がある。山田さんが東京に出てきてしばらくした頃だったとおもう。木村さんは私と会うなり、「いやあ、今日企画庁の友人から愉快的話を聞いた」という。どんなことですかと問うと、その友人の話では、企画庁にいるある職員だが、大学在学中に国家公務員六級職（いまの上級職）試験に合格していたのにそれを申告しなかったので、今では月給にも響いているのだけでも一向に気にしない人物がいるというので、よく聞いてみると、なんとそれが山田貢君だったんだよ、という話であった。木村先生はますます山田さんが気に入った様子で、いろいろな仕事で山田さんを信頼して片腕としていた。

貢さんの葬儀は無宗教でしずかに営まれた。棺のなかで目を閉じている貢さんの品格が辺りを払っていた。人の最期というのは、その全生涯の一瞬のそして永遠の凝集であるのかもしれないと思った。